

演劇的アプローチによる絵本の読み聞かせの一提言(3)

～学生達のレスポンス、まとめ～

絹 川 文 仁

One guide to reading and performing a picture book in view of one essence of play(3)

Fumihito KINUKAWA

序

前稿(*1)でも強調したのだが、教育における様々な場面での教師と学生との密なコミュニケーションは最重要ということはあっても、不要とする考えは皆無に近いであろう。ただ少しか慎重に考えてみると、仲良しグループの如く無秩序なまでにベタベタと交流すればいいというものでもない。また、学生の勉学意欲等をあまりに低下させるかのような、中身の失って伴っていないまま(単なる内容の直接的な重要さのみならず、当座の学生達の興味にタイムリーに働きかけながら、様々なメタファを引用しつつ一見困難そうな教育目的にぐいっと引っ張ってやれる教育能力や、一見全く学生の関心に働きかけられそうもない内容ですら、長期的には何か重要さを認識しえらるうことを上手く説得しうる能力等も包含した意味で)頭ごなしで押しつけがましい、不条理ともいえる教師の態度にも問題があろう。無論、学校もある社会なわけであり、社会は雑菌だらけでその抵抗力の獲得も必要とした場合、ある程度の「反面教師」は時として、思いがけないポジティブな教育効果を生み出すことも想像できるが、やはりそこは程度問題といわざるをえない。いずれにしても以上を慎重に弁えつつ、教師は学生との密なコミュニケーションを図っていかなければならないのだが、そこでほぼ無条件に重要視されるのが、当たり前のように「言葉」なのである。コンピューターが当たり前のように普及しても、それとは反比例するかのよう学校や地域コミュニティの崩壊が叫ばれ続ける昨今、少なくとも筆者には「言葉づかいの退廃」がその起因となっているように感じられる。端的に言って、生徒と教師間に安易なまでに平等主義を持ち込み、礼儀作法等に関わる言葉づかいが教育現

場から消失しかかっていることなどは、その顕著な例だ。言葉と教育との関わりを、現実の問題を直視しながら、鋭く言及しているのが以下である。「教育の崩壊とは実は教師および生徒(学生)における言語活動の衰退のことにほかならない、という現実を直視しなければなりません。教科書をなぞったり黒板に文字や記号を連ねるだけの教師、子ども達との問答を避ける先生、マニュアル式に答案に記入するだけの生徒、授業中に教室内を歩き回ったり教室に出入りする学生、そして教室に出席することすらできずにゲームセンターに入り浸ったりする生徒、そして自宅で自閉する生徒・学生、それらすべて、フェルディナンド・ド・ソシュールのいう「ランガージュ」(言論活動)から逃走する者達の姿です。彼らはバロール(個人の発話)忌避しつつづけています。その挙げ句に、言語活動を可能ならしめているラング(言葉の潜在的かつ制度的な構造)を喪失しつつあるのです。ついでに申し添えておくと、ラングの構造は、シニフィアンつまり「意味するもの」とシニフィエつまり「意味されるもの」のあいだに必然的な関係は乏しいという点で——たとえば「馬」を「ウマ」と名付けることに何らの必然性がないという意味で——恣意的でもあります。その恣意的なものを過去から継承しなければ、社交の言葉は出てこないのです。言論活動に不活発な教師や生徒・学生にいわゆるアカウンタビリティ(説明能力)が備わるはずがありません。「説明能力」とは、自分の行為における動機と結果との繋がりを——その繋がりにかんする予測のことをはじめとして——言論活動として表現することでしょう。その能力が、政治家や役人や経営者において著しく減退しているのは周知のところですから、教育に関係するものたちのみを責めても為様

がないとは、私も承知しています。しかし、それにしても、学校における言語活動の弱化は、言語活動を盛んにするのが学校の役割であるだけに、目立つのです。いや、「言語」と一括りにするのは乱暴にすぎるかもしれません。言語は「自然言語」と「人工言語」の分かたれ、そして自然言語の派生として「身体言語」が、さらに人工言語の派生として「機械言語」が随伴します。繁殖しているのはこれらの派生体、つまりボディランゲージ（身体言語）とマシンランゲージ（機械言語）をめぐる活動のほうです。それらの母体である日常言語と科学（の概念）言語は縮退の一途にあります。行為の動機の発生源は身体や機械にあるとか、その責任も身体や機械がとるであろうとかいわれるような御時世なのです。社交の言語活動に精出する人間はいずれ珍種の生命体・機械体とみなされかねない勢いです。その意味で、世界はオズヴァルト・シュペングラーのいったデル・ウンターガング（没落）の周期にあるとみてよいでしょう。その証拠に、「あらゆる没落期を希望をもって歓迎する“新人”（シュペングラー）が言論および世論の方面に大量発生しております。それら「知的凡庸の崇拜者」（同）が「根のない都市的大衆」にたいして、「劇場と娯楽場、スポーツと現代文学」（同）の場で、「宣伝効果を狙うための特徴的な形式である誹謗というやり方」（同）を教え込んでいるのです。（*2）」

些か問題点が拡大されたかのような文言かもしれませんが、筆者がここまで引用してみせたのは他でもなく、学生のみならず、筆者を含めた教育関係者が「言葉」「言論」なるものを上記のようなレベルまで深く掘り下げて考え抜き、日常の教育活動を展開しているかを今一度確認しても無益ではないであろうことを感じたからである。そして、このような問題意識こそが、前稿でも述べたが、本研究の一連に通底した根幹なのである。

* 1 千葉経済大学短期大学部研究紀要第5号（2009年
発刊予定）に掲載予定。以下、前稿とは全て同書。

* 2 教育 不可能なれども 西部邁 ダイアモンド
社 第1刷 2007 （108～110）

本章

前稿に続いて「絵本の読み聞かせについての既存の書

物」「本論」について、以下のように学生の声を適宜紹介しながら考察していく。

「絵本の読み聞かせについての既存の書物」について

以前、筆者が本項において力説したことをざっと確認すると以下ようになる。

「どのように読むにしろ、結果的に（それなりのレベルで）絵本の読み聞かせができるようになるには、絵本にとどまらず、紙芝居や演劇、そして音楽や美術等々、多くの表現芸術に身を委ね続けていくことが大切である。そこにおいては、当然の如く、沢山のマニュアルめいたものと遭遇し続けていくのであって、その都度取捨選択をしていかなければならない。その積み重ねから、絵本の読み聞かせにおける「あなた流」がようやくでき始めるのであり、それによって少しづつ「自然に流れ出るような表現」「難しく考えずに読めること」が可能となってくる。またそれによって聞き手は初めて「その人その人の味」を感じ取れる。しかし、だからといって、どんな場面でもそれらが保証されるわけではなく、その確立が少しでも上向くよう、新たなマニュアル等を求めていくしかないのである。『以上は、全ての表現の宿命と言い切って差し支えないであろう』

おおよそ過半数を超えていたといえるものが、以下の例に代表されているものだ。

1. 「すなお、飾り気なく、心を込めて、自然に」や「あなた流、誰のものとも違う」という言葉は一見、その通りだと思える。しかし、いざ絵本を読み聞かせようという機会に出会ったときに、本の内容を思い返しても参考になるものは何もない。先生の言うとおり、具体的なことが示されていないからであろう。一方、代田知子さんの「読み聞かせわくわくハンドブック」に書かれている内容はわかりやすい。見出しだけ見ても、詳しく読んでみたくなるような構成となっているし、挿絵や間の重要性についても納得が出来る。また、松井直さんの、読み手が物語をよく理解することが重要であるということもその通りだと思う。これは、絵本の読み聞かせだけではなく、小学校での授業でも通じるもので、教師が教材をよく研究し、楽しんで授業ができるかということと同じだと思う。読み手が、挿絵から多くの情報を得たり、文章の改行や、単語と単語の間の空白にどんな意味があるのかとい

うことをよく研究する必要があると思う。

2, “心をこめて” “あなた流に” “自然に” という言葉は私もよく聞く気がする。確かにあなた流ですなおに心をこめて、と言われるとホッとすると。しかし “すなお” や “心をこめて” といった言葉は漠然としていて、具体的にどのような読み方なのか、声を大きくするのか小さくするのか、スピードは速くするのか遅くするのかといったことがわからない。結局、どう読めばいいかわからず、参考にならないと思う。ただ、“あなた流” と言われると、私なりの読み方なのだから何でも良いのだと思ってホッとすると。つまり、読み方を極めようと努力するのではなく、私流だからといって、簡単な方へ逃げてしまうのだと思う。“あなた流” ではなく、「ここはゆっくりと」「ここはたっぷりと間を取って」「ここは軽やかに」などと具体的に読み方を教えてもらえれば、その読み方を極めて、そこから自分なりに解釈して表現を広げられるのではないかと思う。また、松井直氏の著作の中で、絵本の重要な挿絵をよく見て物語を読み取ることが重要だとあったが、このようにどこに着目すればいいのか具体的に教えてもらえるととても分かりやすいと思う。

3, 「読み手の余計な思い入れで読まない」という文を読んで、プロの奏者を想像した。プロの奏者は余計な思い入れがなく演奏しているように見える。しかし、高校生や中学生の演奏は様々な思いを持ち演奏しているだろう。団体によっては、体全体までも使って演奏している場合もある。また、プロの奏者は力を入れずに力まぎに演奏している印象がある。しかし、中高生は体全体でも表現しようとしている。今の私には、絵本の読み聞かせで、中高生のように強い思いを持ち、体全体で表現することが必要なのだと思った。難しく考えずに読めて初めて「その人その人の味」を感じ取れると著者は述べている。実際、今の自分は、ひとつひとつの言葉はどのように話すかを考えている。難しく考えずに読むには経験を積み重ねていくことも必要だと思った。

大方以上のような意見だったが、他に以下のようなものも結構あった。

4, 絵本の読み方には2つのパターンがある。感情を込めて読む方法と淡々と読む方法だ。このことは授業で話し合ったが、私の意見では淡々と読む方法は幼児期にとってふさわしくないと思う。多くの経験を重ねた人が淡々と読むことは、感情を込めて読む事よりも良い読み方になると授業でわかった。しかし、この方法は読み手だけでなく、聞き手もそれな

りの経験が必要だと思う。全ての出発点ともいえる幼児期において、難しい方法だと考え、ふさわしくはないと思う。

5, 読み聞かせを大きく2つの種類に分けると「淡々と読む」と「声の強弱、抑揚などを工夫して読む」とことになりま。私は一年生の講義や実習では、常に後者の方で読み聞かせを行ってきました。そして、「淡々と読むこと」は良くないと思い込んできました。なので、実習先で淡々と絵本を読むことを指導されたという友人の話聞いて驚きました。そのことを知ると、確かにどちらの方法で読むのが良いのか悩んでしまいました。どちらにもそれぞれメリットデメリットがあるので、正しいのはどちらの方法かは決められないと思います。

以上の1、～5、のどれも、それほどの誤解や曲解、偏見等と思われるものではない。成る程、各学生なりに正直な思いに基づいた考えを述べ進めていってくれたことは認められよう。しかし、少々短絡的ともとれる、安易な二項対立的論調に傾いているのが気がかりだ。確かに筆者は前稿において「あなた流」や「すなおに自然に」といったフレーズに付きまといがちな具体性の欠如を指摘してはいる。しかし同時に、それらを全否定しているのではないこと、具体的なマニュアルを無条件に信奉する立場にもないことを明確に断つてみせている。そのあたりが残念ながら読み過ぎされているような気がしてならない。だからこそ、本項の冒頭で今一度前稿の趣旨「たくさんの表現芸術に身を委ねていながら、様々なマニュアルに遭遇し、またその都度それらを取捨選択し続けていった結果、いわゆる自分流ができていく云々」を確認したのである。言うなれば、絵本の読み聞かせ一つを本当に上達させていくには、一見対立するような問題も、双方を交互にあるいは断続的または同時に取り込んでいくというような、複合的且つ段階的プロセスを伴った経験こそが肝要なのだ。これはおそらく、芸術や創造のみならず、スポーツや文学等、全ての表現に関わる行為の「上達、進歩」にほぼ共通のものと言い切ってまず差し支えないであろう。そういった意味で、上記1、2、では、「あなた流」等と、具体的なマニュアルを平板なまでに比較して、後者の優っている点だけを強調している論調でしかない。また、パラレルな意味で、3、ではプロと中高生の演奏の対比が言及されている。着眼点としてはなかなか面白く、段階としての時空間性

も感じさせないではないのだが、ではプロにこそ中高生のような姿勢が時には強烈に必要な時もある等の言説がないのが残念である。一方、4, 5, では「淡々と読む」と「感情を入れて読む」をあっさりと対立させている。教育実習でこの種の問題に出くわした学生が少なからずいたという報告を受けて、これについては、確かに授業で話題にして学生間で意見交換はしたが、そこで筆者なりに結論づけたところは～4, でも断片的に触れられているが、あまりに言葉不足であり、誤解している部分も否めない～それぞれの絵本にふさわしく表情豊かに読めるほど経験を積んだ人が、敢えて淡々と読んでみせるのと、表情豊かに読めるほどの経験をつんでいない人が淡々と読んだのとは、全くレベルが違う、ということなのである。要は、同じ淡々と読むのにも、様々な次元があるということなのだ。そういった意味では、筆者は、絵本の読み聞かせの初心者はある程度の段階までは（前稿で述べたように）挿絵や文字の配列のされ方々々を大きなヒントに、限りなく表情豊かに読んでいくことを提唱する立場にあるのだ。ただ、本稿では今ひとつ以下の考えも補足したい。というのも、表情豊かに読んでいくにあたって、果たしてそれがその絵本にふさわしいものであるか、或いは、読み手の恣意的な解釈に偏っていないかを自己検証するために、「淡々と読みうる」ような視点を常に維持していく必要があるということである。その種の冷静さや慎重さを保持しつつ、時に必要とあれば、子ども達が驚くほど大胆に読んでみせられるバイタリティをも膨らませられるエネルギーも発揮するべき、とも換言できよう。それゆえに、双方は単純な対立概念と規定されるべきものでは断じてなく、補完しあったり、相乗効果をもたらす関係にあると認識したほうが、極めて妥当となってくるのである。実は、こういった思考によって、昨今の教育現場を混乱せしめてきた「ゆとり教育」とその対をなす「詰め込み教育」も、パラレルに位置づけられるのである。以下はその至言といえよう。

『詰め込みについてですが、私はそれが私の認識能力の底辺を形成してくれていると考え、それゆえ詰め込みは有益なりと断定したい気持ちでいます。たとえば、歴史的出来事の年代を記憶する、という悪評高い知識の詰め込みのものを取り上げてみましょう。その詰め込みのおかげで、歴史の流れの様子が自分の精神

に刻印されたのだ、という思いが私の場合、強いのです。（中略）もちろん、詰め込みの効用といっても、それには条件が必要です。つまり浅く広く詰め込まなければなりません。いや、広さが肝要で、できれば深いほうがよいのですが、能力の限界からして、広さを重視すると、いきおい浅くなってしまうということにすぎません。（中略）ともかく、知識に広さがあると、個々の情報のあいだのコンフィギュレーション（布置）が把握できます。思うに、情報のミーニング（意味）の重さは、他の諸情報との比較においてのみ測られるのではないのでしょうか。（中略）諸々の知識の布置とは言葉のコンステレーション（星座）のことだ、ということもできましょう。星々の形状や動向は互いの引力関係のなかで決まっています。それに似て、個別の情報は知識の広がりの中でその意味が定まってくる、そうとらえるのがセマンティックス（意味論）の根本です。（中略）しかし詰め込みの作業には、主観においては疲労が溜まりますし、客観にあっては知識が（星座どころか）星雲の状態となって混迷に陥るという危険が伴います。教科書や参考書なら、あらかじめ星座（諸情報の布置）が示されていますが、それ以外の情報を仕入れるとなると、その布置を見定めるのが苦労なのです。そこでゆとりの必要が、教師と教え子の双方から発出されるのは当然の成り行きといわなければなりません。（中略）ともかく私のいいたいのは、ストレーン（緊張）とスラック（たるみ）が交互にやってきてこそその人生ということにすぎません。その波動につれて学力の上昇と下降、学級規律の充実と弛緩が交替して現れてくることでしょう。それで一向にかまわないのです。（中略）大事なのは、ゆとりもたるみも来たるべき詰め込みや緊張のための準備段階なのだとして位置づけておくことです。いや、その準備を人は自覚しているわけですから、ゆとりの時期には、詰め込みや緊張が訪れることを予定しているのです。逆もいえて、詰め込みや緊張の時期には、ゆとりやたるみをやってくるのを期待しているわけです。要するに、忙中閑ありであり、そして閑中忙ありである、とわきまえていけばよいのだと私は思います。但し次のことを確認しておかなければならないでしょう。ビジネス（多忙）とは、オブジェクティブ（明確な目的）を達成するためにインスツルメント（手段）の組み合わせをやっている状態のことです。その多忙は、目的

達成とともに消失するほかありません。他方、レジャー（余暇）の中心には、新たな目的の探究とそれに相応する新たな手段の探索という精神活動があります。その意味では、余暇ほど多忙な時間またとない、といえそうです。考えてみれば、明確な目的はおおむね短期のもので、長期には、環境条件が時々刻々と変わっていくのですから、明確な目的も変更されざるをえません。つまり多忙の視野は短期的なのです。他方、余暇が将来の目的・手段を採る活動なのだすると、その視野は長期的です。そして、（自分の死のことを予想するがゆえに）時間意識を持たざるをえない特殊な動物としての人間は、長期の展望の下に短期の行為に精を出すのです。しかしそれと同時に、短期の行為に依拠して長期の展望を組み立てるということもしております。そういう形で時間意識（という主観の次元）における往復を不断に繰り返している、それが人間なのです。（中略）多忙と余暇は自分の人生のあらゆる時間の両面性であったと気づきます。だから、詰め込み教育とゆとり教育のあいだで二者択一を迫るような教育論は笑止千万、と片づけたいと強く思うのです（*3）。』上記には「ゆとりもたるみも来たるべき詰め込みのための準備段階、詰め込みや緊張に時期にはゆとりやたるみをやってくるのを期待している」とあるが、これほどまでにわかりやすく双方の連関を説明してみせた著述を（特に教育関係の書物および識者のコメントで）筆者は寡聞にして知らない。あっさり言って、「わかりやすい説明」「具体的な説明」というと、殆どが「ゆとりがいいのか」「詰め込みがいいのか」の立場を白黒はっきりさせることのみにはしかありえないような、半ば強迫観念にも近い論調や雰囲気や殊更教育界を支配してきたとしかいいようのないものがある。そういった意味でも上記のような思考は、いかなる専門を有していても、或いはいかなる場面においても、教育関係者が大なり小なり保持すべき教育の根底的観念であると、筆者は確信する。

他方“一見それらしい”意見も垣間見られた。以下の6、がその顕著な例だ。

6、何が良くて何が悪いとかは人の決めることではなく、その人その人のやり方で良いのではないかと思う。

熱心に子どもに読み聞かせる事は、悪い方向にはいかない

のではと思います。その作品によって伝えてほしい作者、筆者にはあるかもしれないが、人の声、作者、筆者の伝えてほしい形は絵本を見ているだけではわからない。読み手の捉え方で良いのではないかと思いました。

筆者の印象では、活字にはしないものの、以上のような考えは意外なほど学生達に潜在しているようだ。いわば「あなた流」を何がしか正当化してみせた文言とも捉えられよう。それについて筆者は前稿で、かなりの量を割いて論じたのでここでは省略し、他の学生の意見で、6、を対立しているかのものがあるので、以下7、として紹介したい。

7、あなた流を会得するにはまず、先駆者が考えたマニュアル的な読みの練習や現場での経験が必要である。それをせずに、あなた流を貫いてもそれはただの自己満足であり、聞き手の子どもが満足するような読み聞かせにはならない。

6、7、双方の是非についての明言は、複合的な教育的配慮に基づいて敢えて避けてみたい。ただ、「美」あるいは「物事の洗練、習熟」といった類のキーワードを基に考え進めた場合、自ずとその結果は明確に見えてこよう。いずれにしても、以上のごとく、拮抗をもたらすような学生達の多様な意見をじっくりと開陳していきながらの授業展開は、高等教育にふさわしい濃密なものとなりえよう。しかし、週一度という絶対的時間数の不足から、筆者の力量不足も手伝って、その2～3歩手前で終わってしまうのが、何とも歯痒いものがある。

*3 教育 不可能なれども 西部邁 ダイヤモンド社 第1刷 2007 (56~62)

「本論」について

決して大袈裟な物言いをするつもりはないが、あかんべノントンの読み聞かせ方について、オペラや芝居の台本を読み進める事に基づいた明確な根拠（挿絵を入念に見る、ナレーションとセリフの区別、字面の工夫された配列等）をもとに筆者なりに具体的な指針をいくつか提示してみせた事は、以下のごとく、かなりの学生には様々な驚きをもたらしたようである。

1、擬態語の様子、挿絵の大きさ、文字の太さ、文字の傾き、

ミツバチの動作、前ページからの文章の微妙な変化など、着目する点が多いことに驚いた。第1回目の授業で、ノンタンのプリントが配られて、1度読んだ時点では全く気にもとめなかったことが、こんなにも重要な意味があり、作者の意図が含まれているものかと思った。

2、どれも素人が感じ取るには困難なポイントばかりだった。特に14ページのノンタンが自分の家に帰るシーンで、挿絵と文章とのバランスからノンタンに不安要素があることを示唆していることが分かると思うが、おそらく私にはそれに気づくことはできないのではないかと思う。絵本を読み聞かせた経験が少ないこと、絵本を読む時に文章と絵のバランスを考えて読んだ事がない等が、理由としてあげられる。おそらく私には芸術の良い悪いを判断する目が養われていたら、経験の少なさを補って絵本のポイントに気づくことができたかもしれない。この本論を読んで、保育者・教育者が、教材であったり、子供たちの作品等を見る目いかに大切かということ強く感じた。そして、多くの作品に触れることで、自分の目を養っていかなければならないと感じた。

3、たかが絵本、されど絵本…本当に奥が深いと思う。挿絵を入念に見ていない、ナレーションとセリフの区別、ナレーション等字面の配列、読み方のメリハリ等々は、私に足りないところだと思った。先駆けて絵本を観察することが大事だと学んだ。私がとても驚いたことは、ノンタンについてきたハチである。何かしら作者の意図をもったハチがノンタンのあっかんべーに最初は驚き、そのあとは慣れたかのようについてくる。しかし、おひさまに返しをされたノンタン同様に驚き、のけぞるハチの姿を見て、ハチからもいろいろな情景が浮かんでくることが伝わった。また字の配列、余白までも作者の意図があったことを知り、驚いた。そういうことから絵本の奥深さが計りしれる。

4、私はこの授業をとるまで、ノンタンの絵本に作者の思いがこんなにもたくさん詰まっていたなんて知らなかったです。また、ノンタンのいたずらっ子の性格や、ノンタンにいつもついてくるハチがノンタンのあっかんべーによって思わず驚き、すごく愛らしく可愛いなと思いました。挿絵や文章が斜めになっていてユニークで、私も楽しく読むことができました。子どもたちは私以上に楽しんでいると思いました。ノンタンを見る目が180度変わりました。

5、私は、始めこのノンタンを見たときに、ストーリーのことしか頭になかった。ストーリーのことだけを考えて、読み聞かせをしようとしていた。しかし実際に授業を受けたり、論文を見たりすると、私の考えがいかに浅はかだったのかが

わかってきた。読み聞かせのレベルを上げるには、文字がどう配列されているか、挿絵がどのように描かれているのかを注意深く観察し、作者の意図を理解しようと試みなければならぬ。私はこういったことを見ようとしていなかった。たかが子どものために作られた絵本、と侮っていた。しかし、実はそのひとつひとつに緻密な計算がされていたのだ。一番印象深かったのは、14ページのノンタンが自分の家に帰るシーンだ。余白が不自然にも多いということに気付かなかった。確かに言われてみると、そうであり、何となく不気味さが漂ってくる。こういった細かいところまで目が行く、観察力や感性をこの授業の中で磨いていきたい。

6、ノンタンの話の中で、文と文の間に「間」がある。私はこの「間」にはそこまで深い意味はないものだと思っていた。しかし、それは間違いで、「間」には意味があるのだということを知った。

少々自慢話的な色合いを帯びてしまうことを承知で言うのだが、以上のような学生たちのリスポンスを少なからず引き出したことは、筆者の授業「総合演習」における目的はほぼ達成されたと断言しても良く、また、5回目の授業時に前稿のコピーを全学生に配布した効果もそれなりのものがあって差し支えあるまい。念のために断わっておくが、筆者が授業や前稿を通じて、学生たちに伝えたかったのは決して何かの資料を引用したものではない。元々、筆者の専門たる音楽、その中でもオペラを主として、楽譜や台本をどのようにアナリーゼしていくべきかを、30年近くにもわたる経験からやっとなりこさ体得、獲得してきたものの中から、絵本にも運用可能と思われるものを転用したのである。その種の自負は決して大きくはないが、苦勞した分だけ揺るぎのないものがある。無論、今回の学生の中にも、第1稿の「まとめ」における学生の見解と同様に「学生がどのように思っていたか、どのような感じを抱いたかをあまり重視せず、先生の押し付けが強く感じられました。」といった類の考えが若干あったことも承知している。しかしながら、決して弁解がましいことを言うのではないと断りつつ述べると、学生の意見やプレゼンテーションを軽く見たことなどは一度もなく、学生の考えが如何なるものかを、これまでの筆者の経験から責任をもって判断した上での、アドバイスなり忠告だったのである。今回集めた学生のリスポンスの限りでは、その次元の違いは全員の学生

には認識し得なかったようだが、以上の具体例からも察せられるように、大多数の学生には伝わっていたと言いきれるものがある。このような筆者の教育者としての思いは、ジャンルこそ違えど、次の著述にても換言可能なものがある。

『もしあなたが、東京などの大都市に住んで料理店通いをしていたら、わたしとしては次のように言いたくなります。あなたの料理店選びはまちがっている。こうした言い方が、不遜に響くことはよく承知しています。しかし、わたしの見方には、かなりの明確な根拠があるはずなのです。その根拠とは、わたしが料理の世界を志して以来、莫大と言っていい時間と労力を使い、経済的にも相当の無理をしてまで手に入れた「経験」のことです。ヨーロッパに滞在していた十年以上の間に、すべてとは申しませんが、相当数の評判の良いレストランに、それぞれ一度ならず通いました。食べ歩きに使用した自動車の走行距離はおおよそ地球を七周半するほどに達しました。ヨーロッパの伝統を受け継ぎ、おいしいとされる料理、そして食材の最高の状態を、億を超えるお金をかけて食べ続け、そこから得たわたしの経験は、単にその時々好き嫌いの感覚や自分の性癖といった主観的なものではなく、何かしら客観的な確かさがある、と思われてならないのです。(*4)』

シンプルに言って、教育者たる者、この著述のような「長年の様々な苦労や経験の積み重ね」に基づく「確かな根拠」を伴った「心意気」を有して、ある意味で当たり前なはずである。ところが、前述のように場違いな形で教育現場に平等主義が持ち込まれ（時には民主主義も）、それでなくとも僅か4年程度の教員養成プログラムしかない等の現実的制約の結果、教師と生徒とのコミュニケーションが歪み始め、教育が退廃に陥ってしまい、「確かな根拠」に基づいた「教師としてのプライド」等は消失しかかっているのが、悲しいかな現状だ。即効性のある解決策は、事が事であるがゆえにまず不可能に近い。しかし、やはり入念な「言葉づかい」に徹したところから始まりえる「単純、平板ではない」「複眼的、複合的」思考を強い精神力で維持し、そういった「経験」を積み重ねていくことから何がしかのヒントや答えに近いものを獲得していく事こそ～初めはまず教師側から、後に生徒側も～時間はかかるものの、ひとつの打開策になりえると筆者は確信

している。何故と言って、これまでの言説と重複するが、例えば社会の出来事には単純に二者択一式では認識し得ないものがたくさんあり、視野を広めながらある思考を深めていくと、対立するもの同士が実は補完しあったり、互いに影響を及ぼしあっているといたった事柄を、些細なひとつのきっかけからでも、それに端を発してじっくりと説明してみせられる事は、教師の人格と密接に結びついた、ある意味で最も理想に近い「学究的態度」であり、スクールの語源スコラ（閑暇の意。よって元来学校とは、有意義な暇つぶしの場、とも解釈し得るのである）に起因する理想的な「教育的態度」なのである。

*4 どうすれば本当においしい料理店に出会えるか
西部一明 アスキー新書 初版 2007(4～5)

結び

学生のレポートにもあったが、たかが絵本されど絵本、なのである。昨年度からの本研究を通じて、多少の落胆を禁じえないものとして、将来保育者や教育者を目指す学生達が、その現場で重要な役割を当然担う「絵本」の存在意義自体はあっさりとして認めていても、では具体的にどう対処していくべきか等々の問題意識が少なからず希薄だったことがある。勿論、だからこそ筆者をはじめとした教員養成機関のスタッフのプレゼンテーションが要請されるのだ、といった言い方も可能になってくるのだが、それ以前に、2～3人の高校の演劇部出身者等を除いては、言葉と挿絵双方の細部を良く見るといった注意力が殆どなかったように感じられる。これは楽観視できる問題などでは決してない。本稿でも既に言及したが、人間の社会活動を司る「言葉」の扱いと密接な関係が伺えるからである。個人のコミュニケーションの体験上にしろ、読書にしろ、あるいは意図的国語教育を通じて、幼児から壮年までその度合いの差こそあれ、人間が新たな言葉遣いを会得する際には、先達からの情報を様々なスタイルで得ながら、それなりの意味を認識して初めて使い、そういった作業を一生続けるといってまず間違いあるまい。無論、多様なTPOに応じて、時には生真面目に言葉の意味を踏まえたり、時にはアバウトな感覚で意味を感じ取ってみたり、その認識の度合いも同一人物にあって、千差万別であることも認めざるをえないものがあ

ろう。しかしながら、家庭教育にスタートし、公的教育の第一ステージというべき幼児教育および次の初等教育にあつては、学校教育というものを「将来、社会活動を営むための訓練の場」と位置付けるとするならば、社会活動を司る「言葉」の扱いを最重要視こそすれ、軽視などできるはずがないことをまずは確認しておく。そして、シンプルな挿絵によって感覚的なわかりやすさに溢れている絵本は、その絵によって甘く糖衣された「言葉」の食品（離乳食のような）ないしは小児用薬に喩えられる存在にあるからにして、少なくとも保育者や教育者は決して絵によって齎される「甘く食べやすい感覚」のみから、絵本全体を捉えてはいけないのである。同じ「甘さ」でも、さっぱりとした軽めの甘さなのか、或いは脂肪分もたっぷりて明らかに虫歯になりやすい甘さなのかといった類の注意点も保持しつつ、その「甘さ」と吸収すべき「本体」、即ち挿絵と言葉の連関によるストーリーの展開の仕方を的確に読み取ってこそ、絵本の読み聞かせと踏まえるべきなのだ。勿論、小生の経験から見ても、絵本に出てくる活字としての言葉にも、挿絵的な工夫が施されている場合が頻繁にあり、そのあたりの観察も失ってはいけない。いずれにしても、保育や教育のプロとして公的機関の中で絵本の読み聞かせを実践する者は、以上の責務を負って当然、だからこそ価値のある絵本の読み聞かせができるのである。

以上に述べたような絵本の読み聞かせの意義を、教育や一般社会に絡めて言うと、例えば、ある絵本の登場人物が「おはよう」と話すシーンがあったとする。そこで読み手はその人物の表情をはじめとする挿絵全体の模様および活字のレイアウト等を事細かに読み取って、それに相応しい「おはよう」の発し方を判断する、といったプロセスを経る。ここで咄嗟に気づくのは、学校に限らず、日常生活においても、我々は同じ「おはよう」を、TPOに応じて、そして自己や相手の内情によって、その言い方を無数に使い分けていることだ。その多岐に渡ることにおいては、おそらく日常生活におけるもののほうが勝るであろうが、挿絵等を細かく読み取っていくことも、TPO等に応じていくことも、そのプロセスはまさしくパラレルなのである。そういった意味で、挿絵や言葉の字面を的確に読み取ることによって進められる絵本の読み聞かせは、子供たちにとっては、一般社会において、どういった言葉を

いかなる場面で、どのように発してみせるかのトレーニングにつながるものである。

「馬鹿」は、放送禁止用語であり、教育現場でも、少なくとも教師側が発する事が禁止されている言葉だ。しかし、こういった相手を蔑視するような言葉でも、言い方によっては並々ならぬ愛情を滲ませつつ「お前は本当に馬鹿なやつだなー！」「お前のようなすごいアホは見たことがない、まいったなー！」といった具合に喋る場面は、誰にでもある筈だ。これをも「法律違反！」と近視眼的且つヒステリックに叫ぶ輩には、同じ低次元で「言葉狩りだ！」と感情的に抗弁する必要もなく、せいぜいのところ「ルールには、明文化された法律と、慣習との二種類があることを弁えておくべき」と、声静かに諭してやればいだけなのである。この例にとどまらず、ほぼ全ての言葉には、場面や言い方によっていくらかでも意味合いや色合いが変容するという宿命があることを～そのような意味で、言葉は生き物なのだ～殊、教育者は畏敬の念に近いものを常時抱きつつ、職務に従事すべきであろう。これは大袈裟な物言いのようだが、見方によれば、当たり前な話でもある。再三の繰り返しになるが、よって、保育者や教育者たるもの、絵本の挿絵や字面を的確に解釈してみせるだけの美術的センスおよび多様な言語能力（ボキャブラリーの多さだけでなく、詩や台詞の解釈と読み方等々）を日頃から磨かねばならないのである。そして、それらはまさに五線譜や台本をアナリーゼしていく作業と何ら変わらないのである。